

たが鎮派は之を可とし激派は之を不可として遂に文久三年八月十八日の政変で攘夷親征取止めになったのを機に激派は同志と筑波山に立籠って攘夷の先峰たらんとした。首領藤田小四郎は東湖の子で二十二才の青年であつたが町奉行田丸福之右衛門を同志に加えて総師として筑波山の中禅寺を本陣として先ず日光東照宮に参拝して東照公に素志を訴え栃木の太平山に屯していたが水戸藩の山国喜八郎らの勧告で筑波山に帰り総勢千余勢ますます盛んになったので幕府は追討軍を向けたが敗れたので、更に若年寄田沼意尊を首将として関東の諸大名を連ねて大挙して攻めたのでさすがの天狗党も敵せず山を下り水戸城を襲つて鎮派の根拠を奪わんとしたが戦敗れ那珂湊に転戦、ここでも敗北し

これから天狗党は京都に上つて藩主に訴えようとして大子から那須を経て上野信濃を転戦しながら進み美濃路に入ったがこのとき一橋広喜(烈公の子)が自ら追討の任を引受け既に江州路に入つて来たので武田耕雲齋ら(水戸城攻撃の頃から天狗党に加わり総師となる)急に越前路に入り大雪に逢い進退きわまり加賀藩の軍門に降つた。一同は敦賀のにしんの倉庫のかり牢獄に入れられ慶応元年二月敦賀の永覚寺に於ける假白洲で一通りの糺弾を受けただけで武田耕雲齋、藤田小四郎

以下三百五十二名は斬首、百八十八名は追放、十五才以下の十五名は追払といふ悲惨な結末となり水戸藩の傑物は殆んど処刑されてしまった。明治維新の思想的な背景をつくりながら明治の新政に殆んど水戸人が加わることがなかつた原因はここにあつた。今敦賀市の松原神社(旧県社)はこれら天狗党の勇士をまつたものである。(以下次号)

に お い

霞 月 伸 子

常磐線が北千住を過ぎると、何ともいえない嫌な臭いが時折鼻をつく。風の向きによつてある時は僅かに、ある時は鼻が詰まるように臭ってくる。最近の川は多かれ少かれ、嫌な臭いがするものである。生物は水のある所に棲み始め、人類の文明もそこから発生してきた。川は生物の生命であつた。ところが、おびただしい工業の進出は、資本家の利潤のために川を独占され、工場の有害物質の洗い水と化してきたのである。現在の公害規制は私達を愚弄するかのような曖昧さで、いかにも資本家の